

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

60

2008
1231

年の瀬も押し迫ってまいりましたが、皆様におかれましてはますますお元気でお過ごしのことと存じます。本年最後の発行となります、都市史研究会のニューズレター60号をお届けいたします。

本号では2008年秋以降、12月までの活動の内容と今後の予定について報告いたします。具体的には10月に行われました例会およびレクチャー&ワークショップ、11月に行われました科研費基盤研究「とらっど3」との共催によるシンポジウム「遊廓社会」について、報告要旨や参加記を掲載いたします。

また、本号より三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）が編集担当に加わることとなりました。今後ともよろしく願いいたします。

末筆ながら来年がよい一年でありますよう、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

第70回都市史研究会例会

10月8日、東京大学工学部1号館建築学専攻会議室において、第70回都市史研究会例会が行われました。当日はリチャード・プランツ氏を招いてのレクチャー&ワークショップへの準備を兼ね、同氏の著作『ニューヨーク——都市居住の社会史』を題材に鈴木真歩氏から報告が行われ、活発な討議がなされました。報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨

2008年10月11日にリチャード・プランツ氏を迎えるにあたり、問題意識を共有するべく同氏の建築的業績や出版物の紹介、11日の講演会の中心的話題となる同氏の著作『ニューヨーク——都市居住の社会史』の背景と要点の確認を行った。

同氏はコロンビア大学建築学・都市計画・建築保存大学院においてアーバン・デザイン・コースの長として研究、教育活動に携わりながら、実務も行う建築家である。ニューヨークのハウジングについては、プランツ教授は80年代全般にわたって文献による調査・分析を書きためたものを、89年に『ニューヨーク——都市居住の社会史』にまとめた。

同書は、現在まで残っている都市組成（urban fabric）への関心から19世紀後半以降に登場した複合住宅（multiple dwelling）に限って同市の住宅史を展開している。その内容のうち、個々の住宅タイプ（アパートメント、テナメント、公社による住宅供給など）や不動産の仕組み、都市社会などについては、先行研究に負うところが大きい。

しかし、郊外や戦後の動向まで含めて体系立てて示した研究はなく、そうした点が大きな成果である、という指摘が例会参加者からあった。また対象とする時代がアメリカ社会における建築家の職能の確立・発展と軌を一にしており、また様々な建築規制などの法制も登場していることから、都市建設における専門家の役割と責任の検証を行った研究の側面が強いと報告者は感じている。

例会では、プランツ氏はニューヨークをどのようにとらえているのだろうか、という質問も受けた。報告者としては、プランツ氏は、アメリカ的と言われるような郊外居住の人為性と社会的コストの高さを憂い、アメリカにおける都市居住文化の可能性の代表としてニューヨークを扱っていると考えている。

とはいえ、出版から20年近くの歳月が過ぎ、前提とする社会もまた変わってきている。日本語版に追加された補遺では、中流や低所得者への税制上の優遇が縮小されて貧富の差が激しくなる中、富裕層が都心居住に復帰する一方、公的ハウジングがほとんど消滅して低所得者向けの住宅が不足している様子を伝えている。『ニューヨーク…』に描かれた歴史では、不況下で住宅に関する公的支援が手厚くなっていったが、昨今巨額の財政赤字を抱えるアメリカが、サブプライム問題以降の経済的落ち込みに対する経済政策として公的住宅建設を取ることがないのは明らかである。このことを来日したプランツ氏に問うてみたが、氏自身も明確な答えは得られていないようであった。この困難な時代においてニューヨークはいかなるモデルを提供してくれるのか、そして建築家はここでどのような行動をおこすのか、その趨勢が注目される。

鈴木真歩（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）

レクチャー＆ワークショップ

10月11日、東京大学工学部1号館15号教室において、リチャード・プランツ氏によるレクチャー「ニューヨーク都市居住の転換点——1867～97年（Transitions in the Culture of Housing in New York City, 1867-1897）」が開催されました。レクチャー終了後には同館3階講評室にてワークショップ「ニューヨーク都市居住に関する資料の所在と利用について」も開催され、活発な討議がなされました。以下は参加記です。

参加記

10月11日、コロンビア大学からリチャード・プランツ教授を招いてニューヨークの都市居住に関するレクチャーおよびワークショップが行われた。プランツ氏は建築家として活躍するかたわら、長年に渡り調査・研究にも携わってこられた。実務と研究の両面から建築に関わる人物による研究成果報告という点に興味を抱きつつ参加させていただいた。

プランツ氏は冒頭で19世紀のニューヨークの都市居住に関するレクチャーであることを断りつつ、北アメリカ大陸へのヨーロッパ人による入植時代の説明から始められた。初期のオランダに引き続きニューヨークへ進出したイギリスによる建物見本、街区のグリッドパターンの存在は、主題である19世紀の都市居住に対し、極めて重要な課題となっていたことが後に判明してくる。そしてこれら課題への対策にはイギリスではなくフランスやローマからの影響が強かったことが示された。その象徴としての独立100周年を記念してフランスから「自由の女神像」が贈られたことに触れて締めくくられた。

レクチャーの中には都市を語るための多くのキーワード、要素が登場していた。オランダ、イギリス、フランス、ローマといったヨーロッパ諸国、上流、中流、下流の都市住民、居住者の階層に対応した居住形式、技術などであ

る。これはアメリカという国がヨーロッパの複数の国からの入植を前史とし、かつニューヨークがメトロポリタンとして無数の人種から構成される都市住民を抱えていたことの現れであろう。一方でアメリカ国内の他都市の動向についてはほとんど触れられていなかった。この点は、プランツ氏が阿部氏のコメントに答えてニューヨーク州を一つの国として捉える意識の存在を指摘したことと関係するのかもしれない。ニューヨークの文化圏はアメリカ大陸ではなく大西洋に向けて広がり、ニューヨークにおける居住形態もヨーロッパの動向に影響されていたようだ。

いずれにせよ数多くの要素の関係をそれぞれ紐解いていく分析手法は、ニューヨークに限らず多くの都市分析に有用であろう。しかし、これら要素を整理し19世紀ニューヨークの都市居住を考えるにあたり、「建築家」は重要な位置を占めていた。ニューヨークでは19世紀初頭にフランスで教育を受けた建築家が台頭しはじめていた。建築家に着目しつつその活動の影響を様々な階層の都市居住者、都市の各地域について扱い、客観的評価を行おうとするプランツ氏の姿勢は極めて印象的であった。ここには、プランツ氏自身の建築家としての経験が反映されているように感じられた。

プランツ氏のレクチャーは数多くの実在の建物写真を用いながら進められた。後半に行われたワークショップでも史料としてプランツ氏自身が撮影した建築写真を紹介している。歴史上有名無名を問わず、現在のニューヨークに建ち続けている建築物である。ニューヨークという都市で建築家として活躍している人物にとって、ニューヨークの歴史は現代も体験的に感じることの出来る歴史であるようだ。しかもそれは19世紀よりもはるか以前、独立以前の歴史からである。このような歴史観の下では歴史は現代の問題としてより鮮明に現れ、扱われているといった印象を受けた。ここには、今後都市や建築について考える際のヒントが多分に含まれていると感じた。

三倉葉子（東京大学工学系研究科建築学専攻）

都市史研究会シンポジウム「遊廓社会」

11月1、2日の二日間にわたり、東京大学工学部1号館15号教室において、ぐるーぶ・とらっど3との共催で「遊廓社会」と題したシンポジウムが開催されました。当日の報告者とタイトルは以下のとおりです。

1日（土） 個別報告Ⅰ 13:00~17:00

問題提起 佐賀朝（桃山学院大学）「近世～近代移行期「遊廓社会」研究の課題」

神田由築（お茶の水女子大学）「近世・近代移行期の甲府における遊所——宿場から遊廓へ」

人見佐知子（神戸大学）「北陸・港町遊所の形成～加賀藩相生町新地を事例に～」

相馬英生（三戸市立図書館）「八戸湊の飯盛女」

2日（日） 個別報告Ⅱ+全体討論 10:00~16:40

吉田ゆり子（東京外語大学）「幕末維新时期における横須賀大瀧遊廓」

松田法子（東京大学）「温泉場の「三業」空間——昭和初期熱海における料理屋・待合・置屋」

斎藤俊江（飯田市歴史研究所）「飯田遊廓における娼妓の生活について」

コメント 伊藤毅（東京大学）「失われた飯田遊廓の建築紹介」

全体討論

司会：佐賀朝（桃山学院大学）

参加記

「遊廓」という言葉を聞いて、すぐにイメージされるのは吉原で、少し考えて島原の名が浮かぶ、しかしそれらの内情や仕組みについてはほとんど無知。そんな自分が「遊廓社会」を扱ったシンポジウムに参加して、遊廓やそれに類する施設の、まずはその全国的な広がりを目向けられました。それらの施設が存在する根本的なニーズは、生物に普遍的なもので、ある程度の集客が見込めれば経営は成立するのだろうとは思いますが、しかし、その広がりや具体相を想像したことはありませんでした。今回のそれぞれの報告を通して、全国的に決して有名とはいえない港町や城下町にまで備え付けられた常設の娯楽空間、というイメージが、自分の頭に新たに描きこまれました。温泉地につくられた三業地からは、娯楽空間を創り出す中でそのような娯楽施設が外せなかった事情を感じました。

それぞれの報告を聞きくらべる中で現れてきた各遊廓の共通点・差異や、報告中で述べられていた「モデル＝吉原」という指摘など、複数の事例を見ることで得られた視角は、同じことに関心を抱く方々が一つ処に集まる意味を再認識させるものであったように思います。互いに異なるものを対象にしながら、しかしそれぞれが相互に参照しあえるような人的交流は、素敵なものと思いました。

藤田壮介（東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室）

ラウンドテーブル「伝統都市の残照－北京の伝統景観と記憶－」開催のお知らせ

都市史研究会ではとらっど3およびトヨタ財団研究助成「北京前門・大柵欄地域の伝統的景観の画像化と住民の歴史的記憶に関する緊急調査研究」（代表：熊遠報）と共催で、以下の要領でラウンドテーブルを開催する予定です。また、事前勉強会として第71回都市史研究会例会において、王軍著・多田麻美訳『北京再造古都の運命と建築家梁思成』（集広舎、2008）を取り上げます。詳しい内容については漸次ウェブサイトやメールで報告する予定です。中国史・アジア史のみならず、伝統都市に関心を寄せる研究者および学部・大学院学生諸兄のご参加をお待ち申し上げます。

なお、下記の予定は、やむを得ない事情により変更になる場合があります。また4月以降の都市史研究会の予定は次号ニューズレターでお知らせします。

日時 2009年2月21日 9:45～17:30

会場 東京大学法文1号館215教室

挨拶 吉田伸之（東京大学）

問題提起 熊遠報（早稲田大学）

熊遠報（早稲田大学）「十八世紀、北京の都市景観と住民の生活世界」

王軍（新華通信社）「二十世紀、北京における伝統景観の変貌」

陳捷（国文学研究資料館）「文化人の知識空間：琉璃廠の形成と発展について」

コメント 伊藤毅（東京大学）、吉澤誠一郎（東京大学）

全体討論

『年報都市史研究16 現代都市類型の創出』発行のお知らせ

『年報都市史研究』の最新刊が2009年1月下旬に発行される予定です。特集は2007年11月に開催されたシンポジウム「現代都市類型の創出」です。

特集 現代都市類型の創出

シンポジウムの開催について

ニューヨークにおける初期アパートメントの建設を担った社会層——ロウハウス、高層オフィスビル建設との比較を通して 鈴木真歩

総力戦と都市——「国民防空」態勢整備を通じた都市の組織化 土田宏成

スターリンのモスクワ改造 池田嘉郎

日本橋問屋街の都市不燃化運動——現代都市胎動期としての一九五〇年代 初田香成

「歴史都市」京都にみる近代都市の生成と現代都市の成立 中川理

ラウンドテーブル

論文

近世温泉町の空間構造——熱海を素材にして 松田法子

シュレーヌ田園都市の居住空間と住民にかんする一考察——一九二六～四六年のパリ郊外 中野隆生

書評

佐賀朝著『近代大阪の都市社会構造』 横山百合子

新刊紹介

吉村武彦・山路直充編『都城 古代日本のシンボリズム』 生島修平

藤本強著『市民の考古学2 都市と都城』 北村優季

伊藤毅著『日本史リブレット35 町屋と町並み』 佐賀朝

稲垣栄三著『稲垣栄三著作集3 住宅・都市史研究』 吉田伸之

塚田孝編『近世大阪の法と社会』 武部愛子

塚田孝編『近世大阪の非人と身分的周辺』 竹ノ内雅人

深沢克巳著『商人と更紗』 坂野正則

時評

現代都市事情11——オリンピックと都市 伊藤毅・吉田伸之

絵図史料からみる近世都市の周縁部

— 飯田町と上飯田村 —

竹ノ内雅人（飯田市歴史研究所）

私は東大大学院博士課程に在籍中、とらっど3に事務局として参加しておりましたが、2008年4月から長野県飯田市の飯田市歴史研究所という自治体立の歴史研究所へ、現在横浜国立大学准教授になられた多和田雅保氏の後任として赴任いたしました。設立されて6年目、多和田氏らが作られた基礎のうえで、どうすればいいのだろうと模索し、ときには周りの方から叱咤激励されながら、あっという間に過ぎた9か月。戸惑いながらも故郷とはまた違った地方の生活を体験しつつ研究をするというのは、やりがいのある仕事です。とはいえ、筋金入りの南国育ちが美簗刈る信濃の国に住むことになってしまうとは！ 夏場は快適なのですが、冬場の冷え込みは想像以上で、椎間板ヘルニアを抱える身にとってはなかなかつらいものです。閑話休題。

先ごろ、歴史研究所では明治初期の上飯田村を描いた「信濃国伊那郡上飯田村田畑山林地引絵図」という彩色の3枚組絵図面を購入しました。1枚あたりの幅が200センチ以上もある大きな地図です。

飯田市は脇坂氏5万石、1672（寛文12）年からは堀氏2万石の城下町として、また農業史の泰斗・古島敏雄氏による中馬の研究で有名な三州街道（伊那街道）の宿場町として、天龍川西岸の河岸段丘上に発展しました。残念ながら、1947（昭和22）年におこった大火によって市街地のほとんどを類焼し、かつて小京都とうたわれた街並みはほとんど残っていません。ですが、天明年間には町方に6000人近くという善光寺町につぐ信濃国屈指の人口を有し、2万石の城下町としてはかなりの規模の町でした。

この飯田町は城下町だけで完結していたわけではなく、町の周囲をドーナツ状に取り囲む上飯田村という村落が深いかわりを持っています。本来、中世に飯田郷というひとつの共同体であったものが、近世の城下町建設により、飯田町と上飯田村とに分かれたといわれ、飯田町に住む武士や町人、豪商が上飯田村の田畑を所有していたほか、三州街道沿いに箕瀬町や新町、遠州・秋葉街道へ通じる道沿いに愛宕町と、飯田町に続く街並みながら、行政上は上飯田村に属する地域が展開していました。この飯田町と上飯田村のこみいった関係については、先任の多和田氏が先行研究をまとめつつ論点

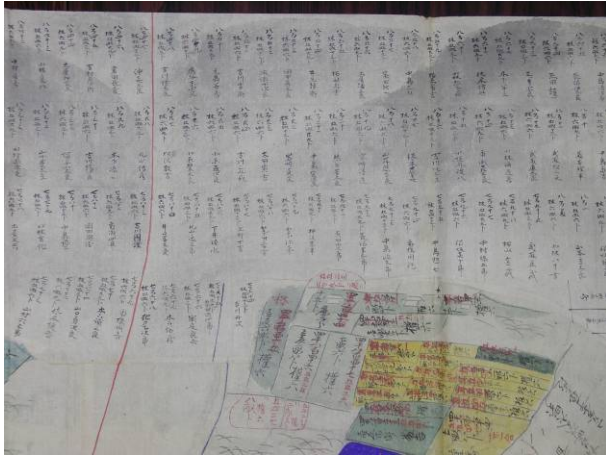
を述べておられるので、今回は割愛します（多和田「近世の上飯田村を知る一課題と方法」（『飯田市歴史研究所年報』6、2008年）などを参照）。



「地引絵図」から上飯田村南東部を描いた部分の全体図（中央から右手の空白は段丘上の飯田城下および城下町）

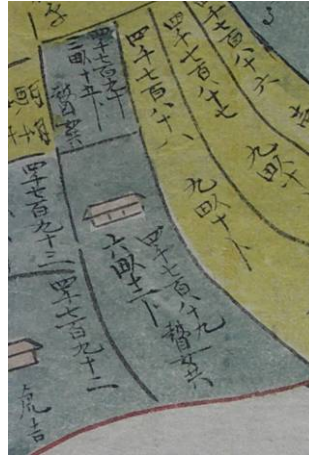
これらの絵図は田畑、屋敷地、山林、荒地を色分けしながら、番地や面積、所有者のほか、道路・水路・土地の区画や地形の様子、寺院や神社の建物まで細かく描きこまれ、当時の土地に関する詳細な情報をひとめで得ることができます。また大きいながらも実用に即した絵図面であったことは、区画の整理や合筆によって番地や面積が朱筆により訂正されたあとがあることから確認できます。

この地図の分析はまだまだ緒に付いたところでもあり、また多和田氏の分析途中ということもあってそれほど突っ込んだ話はできませんが、いくつか気になる点を紹介したいと思います。ひとつは、飯田町に住む豪商の土地所有です。ざっと絵図をみると、小西利三郎（小西屋・本町二丁目・薬種商）、伊原五郎兵衛（近江屋・番匠町・漆器商）、野原半三郎（綿屋・番匠町・金物商）、林弥七（若松屋・薬種商・大横町・天保改革期の金座改役だった後藤三右衛門実家）といった商人の所有地が多いことが確認できるのですが、その所有は村



「地引絵図」の山林部分

(山は墨絵とし、山林の地番・面積・所有者を格子状に記載) 内各地に散在するわけではありません。わりとまとまった範囲で田畑を集積しているケースが多く、上飯田村の南部・南西部を重点的に所有しています。初期からこのような土地所有だったのか、作柄の良し悪しといった土地の性格に絡んだ経営戦略の問題なのか今後の検討課題のひとつといえます。もうひとつは絵図の作成経緯です。これらの絵図面の作成年代について記載はありませんが、「士族持地」などの記載から明治初期のものであることは分かります。明治5年9月に下された地租改正に関わる筑摩県からの布達を調べると、提出を日延べしていた地引帳と同時に、地図も至急提出するようにと命令が出ています(『長野県史』近代史料編第三卷(二)、11頁)。また浜松県のほうで雛形もふくめた地引絵図の描き方を布令しているので(『浜松市史』新編史料編一、193～194頁)、明治5年の作成と特定できそうです。ただ、明治4年には取公されるといわれる寺領・社領の田畑がはっきりと描かれていたり、山林の部分で格子状に区切って情報を記載するかもしくは簡単な山の形を描くかで、区画の境界をすっかり簡略化していたりと、不明な点も散見されます。



女・盲人中

(長屋の様子も描かれている)

そのほかにも、「盲人中」「警女共」の屋敷地が描かれるなど、飯田町を取り巻く身分的周縁の問題も含んでおり、多様な論点が浮かび上がってくる絵図の膨大な情報量に、これを見られた多和田氏ともども「震えが来る」ほどでした。それにもまして印象的なのは、絵図に対する地元の方たちの関心が高かったことです。この絵図の情報を地元の新聞などで公表したとたん、次々と絵図に関する問合せが舞いこんできました。郷土史の研究が盛んな場所柄とはいえ、いくつもの質問が投げかけられたり、地域の研究会で公開して欲しいと依頼されたりと、その反応は予想以上でした。これだけ反応があることは、それだけやりがいを感じる反面、中途半端な仕事や生半可な知識では太刀打ちできないということを痛感させられました。「どれだけ頑張って調べても、地元の人にはかなわない。だから、分からないことは謙虚に地元の方に教えを乞うのが一番」という着任前にいただいた多和田氏のアドバイスを心に刻み、これからも地域の研究と叙述に励んでいきたいと思っています。今後よろしくお願いいたします。

News Letter 都市史研究 Vol. 60
2008年12月31日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：三倉葉子（東京大学院工学系研究科建築学専攻）、小松愛子（同大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学工芸科学研究科）